

を
耕す

希望

若い力

神戸芸術工科大学 学長

松村 秀一

Shuichi Matsumura

建築行脚のまち広島

東京大学時代の私の研究室のOBで、広島大学で建築学を教えている角倉英明さんから、神戸なら広島に近いので、客員教授として講義をしてもらえないかという有難いお話をいただいた。

その打合せも兼ねて久しぶりに広島を訪れたが、平和記念公園の丹下健三の出世作、海との関係が唯一無二の世界遺産厳島神社、同じく世界遺産の原爆ドームをはじめとじて見るべきものが多く、一日ではほんの触りの部分だけということにならざるを得なかった。

それでも、角倉さんのアレンジの

先生の指導を受けた学生たちが詳細な悉皆調査を行い、貴重な記録を残していた。

幸いなことに、その記録は「原爆スラムと呼ばれたまちーひろしま・基町相生通り」(石丸紀興、千葉桂司、矢野正和、山下和也著、あけび書房、二〇二二年刊)として出版されている。

このまちの再開発は一九六九年に始まったが、新たに建てられる高層アパート群は、八・一杉に三千戸という当時としては破格の規模であり、更には人工地盤を多用し、上部を人が通行することで歩車を分離し、その下に約二百店舗の商店街を配するという、小さな都市とも言える内容のもので、建設には約十年の歳月を要した。

今回はその成果たる基町高層アパートを訪ねたわけである。完成から既に四五年を経て、住民の高齢化によるコミュニティの不活性や、建物の老朽化による空室の増加などが起こっていないかと心配しながら伺ったが、とても元気な自治会長さんがいてビックリさせられた。

おかげで、村野藤吾の代表作で重要文化財の世界平和記念聖堂(カトリック幟町教会)と、大高正人が坂出で試していた人口土地の考え方を高層集合住宅に展開して見せた基町高層アパートを、関係者の方々のお話を伺いながらじっくりと見学できた。

基町高層アパート

特に基町高層アパートの場合は、今も多くの方がお住いの集合住宅なので、建物内部に入って見学した経験はなかったが、今回は、角倉さんの知り合いの方々が内部で様々な活動をされているので、中まで入り込むことができて幸運だった。

そもそもこのアパートが建っている地区は広島市中心部の一角で、米軍が原爆投下の目印にしたとされる相生橋に接している。もちろんこも被爆し、あたり一面燃え尽きた。ただし、その後の復興でこのアパートが建設されたのではない。約三千戸の高層アパートが完成したのは一九七八年。戦後三三年も経ってからのことである。

では戦後三三年間、ここには何があったのかと言えば、千軒近い数のバラックから成る「原爆スラム」と呼ばれたまちがあった。そのまちに住んでいた人々と彼らが建てたバラックについては、一九七〇年、当時広島大学の助手だった石丸紀興



団地の一角に展示された模型や写真

自治会長は彫刻家

ここには搭状建物が何本もあり、それごとにエレベーターがある。同じエレベーターに乗るおよそ百世帯が一つの自治会を形成しているのだが、その内の一つの自治会長さんが角倉さんの知り合いということで、お会いした。広島市立大学大学院で彫刻の勉強をしている二十代の板井さんという女性で、その若さに面食らった。

板井さんは、既に地元のテレビや各種メディアで取り上げられているので、詳しくはそちらに譲るとして、まずは、彼女が自治会長になった経緯を聞いてみた。要約すると次のようなことらしい。

便利な場所だし、家賃も安いので、ここに住み始め、近所のおばあちゃんやおじいちゃんをモデルに塑像をつくり始めたところ、モデルになりやつてくる住民の皆が色々と教えてくれるだけでなく、この団

地のお困り事や相談事も集まってくるようになって、問題解決に動いたりしている内に、ご近所からの信頼を獲得。「自治会長に立候補したら」と言われて、その結果自治会長になったということらしい。

自治会長になったら、更に団地中にネットワークができ、一緒に歩いていると、様々な国の人たちの店が並ぶ一階の商店街では、誰もが挨拶してくるし、元々一つながりの庭園として設計された、気持ちの良い屋上を天辺から降りてくると、菜園いじりをしているおばあちゃんが「会長、これあげるよ」とへちまをくれたり、何かとても元気で楽し気なのだ。

一階の空きスペースでは、知り合いのアーティストが展示会を始めていたり、同じ大学の人たちがまちづくりの拠点を設けてこの驚くべき団地の模型を展示していたり、板井さんと同じ世代の人も色々ここに入り込んできている。

やっぱり若い人たちが混じってくると良いですね。